

愚なるが故に道なり

奥井禮喜

第51回

われわれ日本人は、明治以来、個人と国家、 社会の関係で少しは進歩したのか

政治家が「官僚丸投げの政治」を批判すると、大向こうは拍手喝采である。ただし、丸投げするほうが本来批判されるべきであることを忘れてはなるまい。わが民主主義においては、議会こそが最高機関であって、行政府の手足たる官僚制度が諸悪の根源ではないのだから。お茶の間の政治バラエティとしては政治家と官僚の対決は

た。封建制においては、官吏は家臣・家来である。個人的忠誠を紐帯として主人に仕えたのである（家父長主義）。要するに彼らの仕事は主家の家事管理であった。近代国家となり、国家の官吏として、職務上の義務の担当者になった。俸禄に代えて給与を職務の代償とする有給官吏になった。

官僚制はもともと役所とその組織における支配管理様式について与えられた名称であるが、今日では役所だけではなく、企業・政党・各種団体などにおいて、前記の運営方式が基盤となっているのは明確であり、組織を支配する制度は、すべて官僚制であるといってもよからう。

見ものかもしれないが、正しくは、立法と行政は知恵の絞りあいである。官僚制とは、bureaucracyの訳である。もともとフランス語のbureは机にかける毛織物を意味し、それが机と勤務する場所を示す言葉bureauに転化したらしい。官僚制の起源は官吏制度であり、近代国家の成立とともに登場し

た。封建制においては、官吏は家臣・家来である。個人的忠誠を紐帯として主人に仕えたのである（家父長主義）。要するに彼らの仕事は主家の家事管理であった。近代国家となり、国家の官吏として、職務上の義務の担当者になった。俸禄に代えて給与を職務の代償とする有給官吏になった。

官僚制はもともと役所とその組織における支配管理様式について与えられた名称であるが、今日では役所だけではなく、企業・政党・各種団体などにおいて、前記の運営方式が基盤となっているのは明確であり、組織を支配する制度は、すべて官僚制であるといってもよからう。

また、明治以来日本人の特性として、家父長主義・事大主義・画一主義・事なかれ主義の四つが常

に問題視されてきた。つまり、官僚制以前にそのような悪しき風土・体質を抱えているともいえる。

もちろん日本だけではない。

S・N・パーキンソンは「パーキンソンの法則」において、次のような指摘をした。いわく、①仕事量は、完成のために与えられる時間をすべて満たすまで膨張する。②支出額は収入額に達するまで膨張する。——彼は英国の官僚制と官僚について研究した。当時大英帝国が縮小していたにもかかわらず、植民地省職員の定員が増加していた。

政府・自治体における官僚組織も、大企業などにおけるそれも、本質的には同じ病弊を抱えている。外から組織を強権で突いても容易に改良改善できるものではない。強権発動すれば「上に政策あれば下に対策あり」とばかり、ますます防衛本能が発揮されやすい。組織は農地の土壌みたいなものである。耕して、空気を吹き込んで、草むしりをしなければ肥沃にはならない。上意下達の権力的支配にはくれぐれも依存しないこ

とが肝要である。

なぜならば、これらの批判の本質は、「人間の個性が非人間的な組織のなかに沈没し、個人の責任感や、士気というものが感じられない」という一点に絞り込まれるからである。そこで「組織と個人」という馴染みの古い言葉に注目したい。そもそも大組織において、官僚制でない組織が容易に発明されるものではない。また、いかなる組織制度を構築したとしても、「個人と組織」の関係が消滅するものではないのである。

思うに、人間が他の動物と異なつた道を歩むようになって以来、悪しき官僚主義の核を各人が体内に培養したのではあるまいか。社会が発展し、巨大化し、複雑化し、その恩恵も災難も避けられなくなった。いかに個性的に生きようと決心しても、いや、決心すればするほど、社会との摩擦・葛藤が大きくなる。まして、組織においては、官僚制的管理システムが、ますます巧妙化・精緻化して、人間的自由を束縛する傾向にある。各人が束縛を感じない悪しき方法は、煎じ詰めれば、「個人と組織」

というような思考的範疇を無視することである。

明治時代、言葉としての「自我」「個人」「社会」はなく、輸入された。しかし優先したのは「国家」であり「世間」であり、とかく浮世はままならぬのであって、処世術としては「世間をいかに巧みに遊泳するか」の功利主義であった。われわれは、わが国の近代化以来一四一年の時点に在るが、果たして先人たちよりも進歩しているのであろうか。

確かに今は「粗野な時代」ではない。しかし、「個人と組織」の摩擦・葛藤を避けるための手練手管を身上とするのであれば、「官僚機構において、その先頭を走るものは自己存在を放擲したものである。」(カール・ヤスパース)や、「思惟を抑圧せよ、さらば人は自由そのものを抑圧しうるであろう。」(ブチャール)という警告を生かさず、進歩に目を塞ぐ事態を招くのではあるまいか。官僚(制度)批判は他人事ではない。

